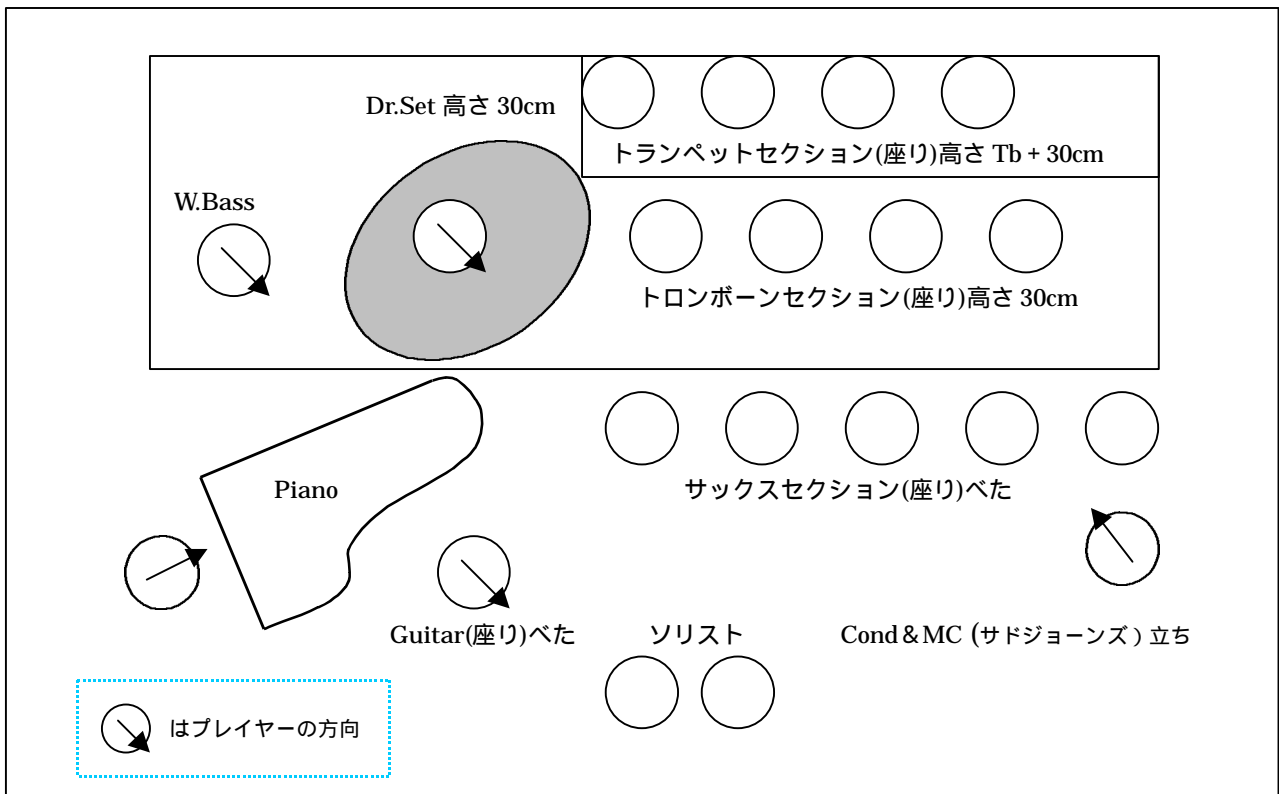


1985年 COUNT BASIE Orch. 来日公演のレイアウト図



日本のどの会場でも緞帳を使わなければこのセッティングが可能です。

参考資料 「キーピングカウント」パイオニアレーザーディスク（ロブスター社より発売）

コンサートスタイルでのステージレイアウトの最も典型的なセッティング例として 85 年に来日した Count Basie Orch.を取り上げてみます。残念ながら Basie 御大は他界されていますが、むしろ映像的に必要以上にピアニストをクローズアップされた配置にならず、あくまでフルバンの基本に忠実なレイアウトを見ることが出来ます。

よく学生バンドや社会人バンドでドラムとトランペットの間からソロに出る為のスペースを開けるセッティングを見ることがありますが Count Basie Orch.では全く隙間がない状態でレイアウトされています。近年のライブではフレディグリーンサウンドのポジションが不明確になっている為に往年のレイアウトからは変化していますが、85年の時点では Basie 存命中のレイアウトが保持されているので大変参考になるとおもわれます。またドラマーとトロンボーンセクションが同列である点も重要な注目点でしょう。

特に映像面で優れている点はカメラワークが多彩で各プレイヤーの視線が分かりやすく、フレディグリーンが健在の為、演奏中プレイヤーの視線がどこに向けられているか判断出来るのでレイアウトの重要性を認識して頂けると思います。入手可能な方は是非ご覧になって下さい。

この来日公演は Basie 亡き後ヨーロッパから急遽呼び戻されたサドジョーンズが Basie Orch.の後継者として元気な姿を見せてくれます。ここでは指揮者でありながらも基本的に演奏中のスタイルはメンバーに曲のポイントを指示するだけで見事にフレディグリーンと作業の分担を実現しています。残念ながらサドジョーンズは Basie Band で僅か1年弱のリーダー活動の後、他界してしまいました。